

千葉県環境審議会鳥獣部会キョン小委員会の開催結果（概要）

1 開催日時 令和6年2月7日（水）

午後1時から午後2時50分

2 開催場所 千葉県森林会館 5階 第1会議室

千葉市中央区長洲 1-15-7

3 出席者

【委員】梶光一委員（委員長）、山崎晃司委員、堀泰洋委員、榎本文夫委員、
濱中修委員、長幡祐自委員、屋代浩委員

【 県 】齋藤和義自然保護課長、他自然保護課職員

4 議 題

第1号 第2次千葉県キョン防除実施計画の中間評価について

5 結果

第1号議題について議論がなされ、事務局が原案を修正したのち、再度、委員の了承を得ることとなった。

6 主な質疑・意見

(1) 資料1の説明について

問 雌が確認された場合でも定着疑いとした理由は。

答 周辺地域で定着が確認されていないのに、メスが単発で捕獲または目撃された事例については、明確に定着したと判断できなかったため。（事務局）

意 状況から総合的に判断したと理解した。

問 キョンとシカの農業被害は区別できているか。

答 キョンとシカの区別は不明な部分があるが、千葉県ではシカの被害金額も高くないため、キョンの被害がシカと判断されていたとしても、被害額は大きく変わらない。
（事務局）

問 キョンの植生への影響は、ニホンジカの影響と区別が難しいとのことだが、シカが生息しない地域でキョンの影響を評価できないか。

答 キョンのみ生息する地域はあるが、生息密度が低い分布外縁部が中心。(事務局)

問 海岸線にセンサーカメラを設置した理由は。

答 生息密度の高いいすみ市から北側へと海岸林が連続しており、キョンの分布拡大ルートとなっている疑いがあり、カメラを連続的に設置して検証した。その結果、キョンの生息は一宮川河口の南側までで、以北では全く確認されなかった。(事務局)

問 銚子市で発見された単発のキョンはどのように移動してきたのか。

答 海岸林は県北部までは連続していないため、県中央部の森林を通して北上した可能性が高い。(事務局)

問 千葉県では北部と南部で自然環境が異なり、北部は森林がまばらであるが、そのような環境でもキョンの定着が確認されるとすれば、北部でも分布が広がるおそれがある。現時点では、そのような兆候は無いか。

答 現状では、北部では単独のオスが突発的に目撃されているだけであり、キョンの定着は確認されていない。(事務局)

(2) 資料2の説明について

意 元々の防除実施計画は最終的に完全排除を目指して進めていたが、生息数の増加に歯止めがかからず、他県でも確認されるなど分布域が広がっている。従って、捕獲の取組を効果的に実施できたという記述は疑問である。また、推定生息数の増加の抑制だけでなく、分布域管理も課題であることを記述した上で、第2次防除実施計画の目標の実現が難しい状況であることを含めて評価すべき。

意 分布の北上を防ぐのが喫緊の課題。茨城県でも、オスではあるが、既に複数頭が目撃されている。現状では分布拡大に歯止めが利かない状況なのだから、生息域の北側に分布拡大防止柵を設置する案も含めて、大胆な事業が必要。

意 現状の評価は非常に楽観的な評価である。正直、根絶は厳しいが、外来生物の観点からすると、他県に侵入させないことが重要である。

意 生息数は夷隅地域でしか減少しておらず、他地域では生息数増加を食い止められていないというのが正確な評価では。次の対策を検討する上で、課題を具体的に絞り込むことが必要。例えば、地域による生息数の増減傾向の違いが捕獲圧の

差に関係するのであれば、生息数が増加する地域でどれだけの捕獲圧が必要となるかの見当をつけたい。せっかくデータの蓄積があるのに、次に具体的に何をすべきかが見えにくい。

意 高齢化が進んでおらず、人材が豊富な地域では捕獲が進むが、過疎化や高齢化により限界集落が多い地域もあり、捕獲圧を高めることは簡単な話ではない。

意 捕獲が進んだ地域の要因は、捕獲者の意識や質が高いこと、地形条件が良いこと、行政がキョンの捕獲に力を入れていることが考えられる。何年か同じ場所でキョンの捕獲を続けると、キョンが捕獲されづらくなることから、捕獲圧をかけ続けることが重要。しかし、予算をつけないとなかなか難しく、現状ではキョンの予算規模が少ない。捕獲者の食指が動く報奨金が必要。

意 中間評価では、現状の対策で十分と捉えられる内容での評価は良くない。具体的な課題の記載があるので、課題に対応した評価が必要。また、成果が上がった地域での要因を具体的に把握し、他地域での対策への活用を考えるべき。

問 成果の中で、計画の目標頭数を達成しているのに、生息数増加を抑えられなかった理由は。

答 計画策定当時の推定生息数に基づいて、生息数の減少に必要な捕獲数を計算すると捕獲目標の8,500頭となる。これを前計画期間最終年の令和2年度にも達成している必要があったが、未達成であったためにキョンの推定生息数が増加し、必要な捕獲数も増加した。(事務局)

意 必要捕獲数が増えたのであれば、目標頭数も増やすべきであった。

問 計画策定時の推定値が最新の推定値とは異なっているので、捕獲目標数が正しいかは検証が必要。年次で随時見直せるとよい。

問 令和2年度から3年度に捕獲数が急激に増えた理由は。

答 正確な把握は難しいが、捕獲者の技術や経験の蓄積や、キョン自体の生息数が増えていることなどが考えられる。(事務局)

意 計画策定時の推定値は、最新の推定値と比べて、どの程度異なるか。

答 同年度で比較すると、計画策定時の推定値は最新の推定値より低い。(事務局)

意 思うような防除に成功している県はまず無い。それほど手強い相手。ただ、ここまでデータを積み上げて、具体的な議論ができるのは千葉県が強み。キョンの防除実施計画の中で捕獲は中心的な部分を占めるので、課題をデータに照らし、実態に

即した形で評価すべき。上手くいった部分とそうでない部分を明確にして、次の手を打つことが重要で、長年捕獲を実施してきた地域で効果が上がっているとのデータが出ているので、その要因を明らかにして、次の作戦を考えることが重要。

意 生息数調査の結果を年次ごとに反映できていないことは、調査モニタリングの課題となるのではないか。

問 生息数推定の結果から実行計画を作成するなど、目標数を上乗せして、その度に、何らかの対策を検討することが重要である。

答 年次ごとの生息調査の結果は市町村や関係機関に伝えている。県としても、得られたモニタリング結果をいかに対策につなげるかが課題だと考えている。(事務局)

意 順応的管理ができていないことも記述した方が良い。根絶は難しいと思うが、千葉県では豊富なデータの蓄積があり、一部の地域だけでもうまく封じ込められているという良い面もあるので、そういったところに活路を見出すべき。

意 外来種なので根絶が必要という認識だが、実現は難しいのが現状。そのため、被害防止を第一目標とし、捕獲だけでなく、防護柵なども活用している。

意 有害捕獲を行っているが、キョンの繁殖能力が高く、根絶は難しいと考えているが、行政として努力が必要と考えている。捕獲者も高齢化しているが、地域の有害鳥獣捕獲に取り組めるように、広い意味で有害鳥獣に取り組んでいきたい。

意 予算も人員も限られるので、優先順位を決めて取り組む必要がある。これ以上生息分布を北上させないことが喫緊の課題。そのためには、個体数を抑制する地域も段階を分けて、特に分布外縁部に強い捕獲圧をかける必要がある。現状のゾーニングよりも細かいゾーンごとに考えて、予算や事業の配分を考える必要がある。

意 他県も非常に注目している。

意 担い手の確保について、捕獲従事者数や推移のデータをみないと、担い手が増えたかの評価はできない。

問 今年度は報道が過熱したかと思うが、啓発活動によって県民からの反響(駆除についての意見など)はあったか。

答 報道が増えた影響もあり、問い合わせが多数あった。駆除に対しては賛否両論あったが、県は外来種対策として根絶を目指すことは伝えている。(事務局)

意 啓発の話だと、高校の教科書に外来種の話がある。子供たちに啓発することが効果的かと思う。

意 狩猟免許試験は既に年10回実施しており、これ以上の拡大は難しい。わな免許は1回90名程度が受験するが、狩猟免許をとっても継続的に捕獲に関わる人は少ないため、狩猟免許取得者数だけの評価では不十分。

意 担い手確保事業について評価する際には、実際にどれだけの人が有害捕獲の担い手として活動したかを評価する必要がある。

答 昔と比べると、今は狩猟を始める方に対する行政の補助（報奨金や猟具の貸与など）が手厚い。

(3) 議題について

意 様々な意見が出たので、事務局で整理して資料2を修正すること。長期的に捕獲に取り組んできた地域では効果が現れ始めているが、それ以外の地域では生息数が増加しており、生息域も拡大しているということが共通認識かと。この書きぶりであれば、課題と矛盾せず、さらに事業を強化する必要があるというメッセージが伝わる。

答 委員の皆様からの意見を反映して資料2を見直し、委員の皆様を確認いただいた上で中間評価とし、残りの2年間の取組を進める。(事務局)